大垣城跡・城下町に眠る人々の生活の跡

～発掘調査で確認された成果～

調査課　加中　雅章

考古学コラム「きずな」NO.16
平成 29 年 12 月 25 日
岐阜県文化財保護センター

＜はじめに＞

大垣城は、美濃守護・土岐一族の宮川安定により、天文 4 年(1535)に創建されたと伝えられており、その城下は美濃国最大の城下町として栄えました。昭和 11 年には天守と艮隅櫓（うしとらすみやぐら）が国宝に指定されましたが昭和 20 年に戦争で焼失しました。外堀として機能していた水門川が今でも流れていますが、当時の姿の大半は失われてしまいました。地元が大垣である私にとっては、戦争で燃える前の大垣城やその周辺はかつてどんな姿だったのか幼い頃からとても気になっていました。今回大垣城跡・城下町の発掘調査に携わることで、戦前の城下町に住んでいた人々の生活の跡を垣間見ることができました。その一部を紹介します。

＜石積を伴う溝状遺構を確認！！＞

今回の調査では長さ 30m以上、最大幅約 5.4m、最大深 1.2mと、とても規模の大きい溝状遺構を確認しました。その溝の北壁寄りでは最大５段の石積が部分的に残存していました。その石積の下には、溝と並行する胴木（石を載せるため石の列に並行させておく木）を１列確認しました。また、胴木の両端直下に、胴木に直交して枕木が１本ずつ設置されていました。胴木は２列、３列以上並べられている例もありますが今回の調査で見つかった胴木は１列だけです。発掘区周辺は、低湿地であることから石積が沈まないように胴木を設置することは必須だったのではないかと思われます。しかし、２列や３列に比べ、１列だけで石を支えるのには不安定だったのではないかと気になるところです。さらに胴木が南側に倒壊しないよう胴木両端の南側に留杭が打ちこまれていました。表面が焼けており、防腐処理されたものでしょうか。発掘区周辺は明治 15 年になると神宮奉斎会大垣本部（昭和 21 年に大垣大神宮と改称）が作られており、地元の方の話によると戦前にはその北側に戸田家藩主の別邸があったとされています。この溝状遺構は、溝の北側にだけしか石積を確認できなかったことから戸田家別邸側のみ護岸施設を設置した可能性があります。

＜石積を伴う溝状遺構から出土した汽車土瓶＞

石積を伴う溝状遺構からは庶民の調理道具でもあった擂鉢、酒を量り売りするために使用された徳利など一般庶民も使用したと考えられる多くの遺物が出土しました。その中で完形の汽車土瓶が溝の上層から１点出土しました。汽車土瓶とは、駅弁とともに販売された茶の容器です。明治時代に東京-新橋で鉄道が開通し、全国に鉄道が開通するとともに駅弁の販売が開始され、明治 22 年には静岡駅で陶器製の茶瓶が販売されました。今では、ペットボトルや缶に入れられていますが、昭和 30 年代ごろまではお茶はやきものの器に入れられていました。今回出土した汽車土瓶の外側には「國府津」「古うづ」と筆書きされています。神奈川県に「国府津駅」があり、この駅で売られた汽車土瓶が大垣まで持ちこまれた可能性があります。この土瓶の底部の内面には炭化物が付着していました。汽車土瓶は使い捨て商品のはじまりともいわれており、東海道線沿いの発掘調査では、線路沿いに列車から捨てられた汽車土瓶が出土しています。この土瓶を購入した人はお茶を飲んだ後、灰皿または灰落としとして利用したのでしょうか？当時の人々の生活の様子がうかがえます。

＜おわりに＞

今回の発掘区は、近世の絵図をみると江戸時代には戸田家の家老屋敷地にあたります。それらに関する明確な遺構は確認できませんでしたが、今回の調査では、明治時代の戸田家別邸に伴う可能性がある溝状遺構を見つけることができました。その一方で、その溝状遺構の埋土からは汽車土瓶のような庶民も使用したと考えられる遺物が出土しました。戸田家別邸のそばで庶民も使用したと考えられる遺物が出土していることは、何を意味しているのでしょうか。今後周辺の調査が進み、大垣城跡・城下町の実態がさらに明らかになる日がくるかもしれません。